

令和 2 年 2 月 19 日

教 育 長 様

代表者 校 園 名 : 大阪市立加島小学校

校 園 長 名 : 井 上 克 己

電 話 : 6309-8641 F A X : 6309-7210

事務職員名 : 上村 美奈子

申請者 校 園 名 : 大阪市立加島小学校

職 名 ・ 名 前 : 教諭・真田 穰人

電 話 : 6309-8641 F A X : 6309-7210

校印

研究コース	
グループ研究 A	
選定番号	117
校 園 コード (代表者校 園 の市費コード)	
641392	

平成31年度 「がんばる先生支援」研究支援 報告書

◇平成31年度「がんばる先生支援」研究支援について、次のとおり報告します。

1	研究コース	コース名	グループ研究 A	研究年数	継続研究 (2 年目)
2	研究テーマ	子どもたち一人一人の主体的な学びを支える指導に関する研究 ～Q-Uによるアセスメントと授業UDの視点を活用したわかる・できる授業づくり～			
3	研究目的	<ul style="list-style-type: none"> ・ Q-Uの活用による学級集団・児童一人一人のアセスメントと授業UDの視点に基づく授業改善 ・ 通常学級担任と特別支援教育部の協働的な支援体制づくりとその効果に関する検討 			
4	取り組んだ研究内容	<p>いつ、何のために、どのようなことを実施したのかを具体的に記載してください。</p> <p>はじめに、エビデンスに基づいた実践を行うために、Q-Uを6月に実施し、学級集団と児童一人一人のアセスメントを行った。8月には校内でQ-Uの読み取りとその活用の仕方を学ぶ研修会を開催し、児童一人一人の状態と学級集団の状態を学年担任団全員が把握できるようにした。さらに、校内安心安全全部教育相談担当と連携し、支援が必要な児童一人一人に対して見立てを行い、それに対するアプローチを考え実施した。2学期には、学級全員の適応感を高めるためにピア・サポートを導入した。学習意欲や学業成績を向上させるポジティブ・ピア・レポーティングを実施して人間関係づくりを行ったうえで、ピア・ラーニングを行い、対話を通して子ども同士で支え合いながら学べるようにした。</p> <p>また8月に、授業UDの視点をいかすことができるように、主体的・対話的で深い学びと授業UDに関する研修会を実施した。その中で、新しい知識や理解と子どもの中の既存の知識や理解を駆動させ、つなぐことが深い学びをうむために大切であることを確認した。さらに校内学力向上部と連携して、校内の全職員が週案に授業UDと主体的・対話的で深い学びを生む大阪市の授業のスタンダードの3つの学beeの実施の有無を記入することで、学びの階層モデルの中でも特に基本的で重要と考えられる視覚化、焦点化、共有化を各教員が意識して授業を設計し実践できるようにした。</p> <p>さらに、通常学級担任と特別支援教育部が協働することで、特別な支援を必要とする児童を含む学級の全ての児童が主体的に学ぶことができるように、2学期には単元計画及び、授業計画を通常学級担任と特別支援学級担任が連携して行った。授業計画の際には、特別支援学級担任がもつ児童及び特別支援教育に関する知識と理解を基に、学級の状態を一番知っている学級担任が授業UDの視点を確認しながら、全ての児童が主体的に学べるように計画し、実践を行った。</p> <p>上記の3点の効果について、検討を行った。</p>			

5	成果・課題	<p>大阪府教育振興基本計画に示されている、<u>子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上</u>および<u>教員の資質や指導力の向上</u>について、申請書に記載した検証方法から得られた結果と、それらからの結果に基づいた考察を、具体的に記載してください。</p> <p>○研究の事前事後にQ-U調査を実施した結果、学校生活満足群の児童は、全校平均で11ポイント上昇していた。逆に、非承認群の児童は4.2ポイント、侵害行為認知群の児童は4.4ポイント、不満足群の児童も1.4ポイント減少していた。一方、学校生活意欲に関する項目では、大きな変化は認められなかった。Q-Uを活用したアセスメントをもとに人間関係づくりを進めることにより、道徳心・社会性が育まれ、学校の安心安全が確保されたが、学校生活意欲にはあまり影響を及ぼさなかった可能性が考えられる。</p> <p>○今年度研究の中心となった6年生の算数科の経年調査において、前年度と比較し、「知識」に関する項目で前年度は全市平均より3.2点低かったが、全市平均より0.5点上回っていた。また、「技能」に関する項目で前年度は全市平均より5.6点低かったが、今年度は全市平均より3.3点上回っていた。観察、面談に加えてQ-Uを活用したアセスメントと授業UDの視点をもとに授業設計・実践を進めることで、児童の主体的な学びにつながり、学習内容が定着した結果、学力を向上することができたということが考えられる。</p> <p>○研究の事前事後において、教員アンケートを実施し、「教員の指導力・効力感」に関わる項目で授業UDの視点を意識して授業を行うことができた肯定的に答えた教員は研究前は16%であったが、研究後には83%に上昇し、67%増加していた。授業UDと主体的・対話的で深い学びに関する研修会を実施したうえで、毎週末週案に授業UDや大阪市の授業のスタンダードの3つの学びが達成できたか記入することで、日々の授業を振り返ることができ、教職員の資質・能力の向上につながったということが考えられる。</p> <p>○一人一人の子どもに応じた指導を行なっているか、研究の事前に教員を対象に調査を実施したところ肯定的な回答は38%であったが、研究事後には95%に上昇していた。一方、児童を対象に授業のわかりやすさについて調査をしたところ、数値に大きな変化は認められなかった。Q-Uを活用したアセスメントを軸に通常学級担任と特別支援教育部による協働的な授業づくり、支援体制の構築を図ることができたが、まだ子どもたちの実感として授業のわかりやすさを感じられるまでには至っていない可能性が考えられる。</p> <p>○Q-Uを2回実施し、それに基づいたアセスメントと実践を行うことで、研究のPDCAサイクルを確立し2巡させることができた。研究授業や研究大会に参加して最新の知見・情報を収集するとともに、先駆的な授業・研究を行っている教員・研究者を招聘して研修を行い、助言を得たうえで研究途中に授業づくりの方法、支援体制について見直し、改善を行ったことで、学校の活性化・検証・改善のサイクルの充実させることができたと考えられる。</p>			
		<p>《まとめ》</p> <p>今年度の研究では、Q-Uの活用による学級集団・児童一人一人のアセスメントとピア・サポートによる学級集団作り、そして授業UDの視点に基づく授業改善を行った。それと並行して、通常学級担任と特別支援教育部の協働的な支援体制づくりを行った。</p> <p>その結果、児童の学校生活満足度の向上がみられた。また、児童の知識や理解、技能の向上とともに、教員の授業UDへの理解と教員の資質・能力の向上が図られた。そして、学校の活性化・検証・改善のサイクルを循環させることができた。</p>			
		<p>《課題》</p> <p>今年度は、授業UDの視点の中の基本とも言える3つの視点である視覚化、焦点化、共有化について、実践と研究を進めてきた。しかし、これらは授業の学びの階層モデル（授業UD研究会、2013）における参加と理解の下層へのアプローチであり、習得と活用という上層へのアプローチのためには、時間や場の構造化、展開の構造化に加えて、機能化や適用化などさらに授業設計と実践の際に留意すべき視点や工夫がある。次年度は、その点について、研究を進めることで、児童が授業に参加し理解するだけでなく、習得し活用できるような指導、児童一人一人の主体的な学びを支える指導に関する実践と研究をすすめていく。</p>			
		研究発表等を実施した日・場所・参加者数を記載してください。			
6	研究発表等の日程・場所・参加者数	日程	2年2月13日	参加者数	約35名
		場所	加島小学校多目的室		
		備考			